

頭陀袋

(23) 平成二十六年六月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一—二四五

水ばなのおもてなし (因縁)

ある和尚さんが、お檀下まいりに行つたところ、お婆さんが出てきて「ただいまご飯を炊きますからどうぞ召し上がってください。」と、親切にすすめるので「では遠慮なくご馳走になります。と、読経したあとで席について待つていた。

しかし、おばあさんがお櫃にご飯を移すのを見ていると、鼻から水湧（みずばな）が出て、ぱたり、ぱたりとご飯

の中に落とすので、どうにも食べる気がしなくなつた。「お婆さん、ワシは急に腹が痛くなつたので、せつかくだけれど、ご馳走にならずに帰ります。」

と、言つて丁寧にお断りすると「まあまあ、せつかくお膳立てしたのですから少しなりと」と、薦めるのを、「おお、痛い、痛い。」と、腹を抑えながら顔をしかめて逃げ出した。

数日の後、和尚さんはそのとなりの家まで行く用事があつたので素通りするのも悪いと思い、「おばあさん。このあいだは大変失礼しました。」と、声をかけると、お婆さん、待つてしまつた。どばかりに「どうぞ、どうぞ、私の家で一服していいでください。」袖を取つて引っ張り込むので、「それではちょっと」と、上がり口に腰をおろ

した。するとお婆さん、「和尚さん。甘酒は嫌いじゃないかね。」と、聞く。もともと、甘いものが好きな和尚「好きなほうじやが。」と、答えると「それなら、暖めましょ。」と、すぐコロに乗せて暖め。たちまち大きな茶碗にもつて差し出した。「なかなかうまいよ。おばあちゃん。よう、甘みが出ておる。」といつて、三杯もお変わりしたあとで「おばあちゃん。よくまあ、一人暮らしでこんなに沢山の甘酒をつくられましたなあ。」と、たずねたところ、「いえいえ、この間、和尚さんに召し上がるつていただこうと思つて、炊いたご飯を、召し上がるつてくださらぬので仕方ないから、あのご飯で甘酒を造つたのです。」と。
因縁は逃れられないもののです。
*因果は、皿のふちを一回りするぐら
いの早さで巡つてくる。とか、
昔の人は言つたげな。

*和尚さんの一言

うーん。どこかで、このような場面に出会つたような気がする。人間、ときどきはこんな事になるかもしねん。この先どうなるなんて、予感はするけど、はまりこんでしまうものなんだよね。

*お施餓鬼法要のご案内、

先日、ご案内をいたしましたが六月二十九日（日）施餓鬼法要を計画しましたがどうか、ご参詣くださいますようご案内申し上げます。なおわからないことがありましたらお寺までご連絡ください。